

能を切る

「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文 福永無想

第一回 「8人目の赤子」

夜半に降った雨で秋津川の水かさは増したが、田植えを前にした者たちは「恵みの雨」と言つて喜んだ。

その朝、唐物拔荷改方横目※を仰せつかる矢嶋忠左衛門直明の、宮園の役宅の庭も雨に洗われ、しつとりと潤いを含んでいた。「まだ産まれんとか…」

雨戸を開け放った縁側を行ったり来たりしながら、主の直明は落ち着かない。

この日、矢嶋家では8人目となる赤子が生まれようとしていた。妻の鶴子の陣痛が明け方に始まり、寝所に産婆が入ってから、かれこれ2刻が経とうとしている。

■
今から14年前の文政2(1819)年、直明は櫛島の庄屋・三村家の娘、鶴子を妻にめとつた。うりざね顔にすつと通つた鼻すじ、笑うと目尻が三日月を横にしたように下がる鶴子の笑顔は、直明の心を和ませた。幼い頃から素養があるゆえか、自然とにじみ出る品がある。嫁いだ翌朝から杉

堂の矢嶋家の奉公人と汗を流し、実直な役人肌の直明を献身的に支えた。

結婚の翌年に双子の娘のほ子と、もと子を授かった。この双子の内、長女のにほ子はかねてからの約束の通り、鶴子の実家である三村家の養女としてもらわれていった。

その後、長男の源助、次男の五次郎、3女の順子が生まれ、文政9年には直明の昇進により、一家は杉堂の家から宮園の役宅へと移つた。

■
宮園に移つた翌年のことだった。次男の五次郎が病に冒され、わずか4年という短い生涯を閉じた。男の子にしては色白でまっぴげが長く、すつとんきような空想話を口にしては家族を笑わせてくれた五次郎であった。

その死から2年後、ぼつかり空いた五次郎の居場所を埋めるように4女の久子、続いて5女のつせ子が生まれた。

■
それにしても、鶴子の腹が空いている暇はないというほど矢嶋家は子宝に恵まれた。しかし直明はどこかで、4歳で逝つてしまった息子のことが忘れられずにいた。そして、もし次に子が授かるのであれば、どうか、五次郎の生まれ変わりであつて欲しいと願うのだった。

■
寝所の様子が慌ただしくなってきた。「ほいつ、頭ん見えてきた。奥さんあと少しばいつ」



産婆の声が入る。

「おんぎやあああああ」

それはそれは、大きな産声が寝所から響き渡つた。直明は直感した。赤子ながらこの野太い元気な声は、きっと男子に違いないと。

「父さま、産まれましたあ」

小走りに駆け寄つて来た8歳になる順子の報告を、直明は息を呑んで待つ。順子は顔を上げ、満面の笑みを浮かべてこう告げた。

「女の子です、女の子」

■
天保4(1833)年4月24日。雨上がり若葉の匂いがこもる朝、矢嶋楯子は誕生した。

■
矢嶋家の6女として生まれた「勝子」。のちに「楯子」と名を改めるこの赤子が、日本の女子教育と女性の地位向上に尽力する人物になるなど、この時の直明は知るよしもなかった。

※唐物拔荷改方横目/唐物などの禁止されている品物が、国内に持ち込まれないように監視する役人のこと

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959
開館/9時30分～16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)
入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)
※()は30人以上の団体割引料金

